

聖ルカによる福音書第10章1節～12節、16節～20節

於：聖パウロ教会

司祭 山口千寿

今日の福音書は、イエスさまが72人の弟子たちを町や村に伝道のために遣わされる物語です。この物語はルカだけが伝えています。72名もの弟子たちがイエスさまの周りにはいたということであれば、エルサレムを目指して旅をしていたイエスさまの一行は、とてつもない大きなグループだったということになります。当時、そんな大きな集団が旅をすることなど、果たして可能だったのでしょうか。

そこで、この72名という弟子たちの数は、象徴的な数字であると解釈されるようになりました。それは、当時の人々が考えていた世界中の民族全体の数を表すものだとされています（創世記10章、出エジプト記1:5）。また、荒れ野の旅をしたイスラエルを指導したモーセが、自分の助け手として長老たちを選び、彼らにモーセの霊を分け与えたことが伝えられていますが、その長老たちの数も72名と数えることができます（民数記11:24～30）。因みに、ユダヤの最高法院の議員の数も70名で、2人の議長を加えると72名がサンヘドリンを構成していました。

そういうわけで、今日の福音書では、ルカはイエスさまが弟子たちに賜物を与え、全世界に向かって福音の宣教のために遣わしていることを描いているのです。世界的な視野のもとで宣教が描かれていると言っても良いでしょう。そして、宣教に出かけていった際に、弟子たちが何をしなければならないか、その心得が記されているわけです。

弟子たちが遣わされる目的は、平和を祈ることと神の国の到来を告げることです。イエスさまは、ある家に弟子たちが入ったら、そこで『この家に平和があるように』と言いなさいと命じています。どこかの家を訪ねて、そこで「シャローム」と挨拶をするわけですが、これはユダヤ人の日常的な挨拶の言葉です。しかし単なる挨拶に終わるわけではありません。それ以上のものです。神さまの祝福を祈る祝福の言葉です。

わたしたちもどこかに出かけて行って、お家を訪ねるような時には、まずなすべきことは、「主の平和！」と言って祝福を祈ることです。祝福を祈ることが教会の宣教です。先程、日曜学校の礼拝で子どもたちに、「平和って、どんなこと」と尋ねました。子どもたちには難しい質問だったかも知れません。皆さんだったらどのようにお答えになるのでしょうか。わたしは、平和というのはみんながニコニコ顔でいられることだよ、と言いました。みんながニコニコして、喜びが溢れているところに平和があるんだよ、と感じます。どこかの教会のように、お互いに目を三角にして口をとんがらせているようなところには、平和はほど遠いのではないのでしょうか。

ところで、祈禱書の中に、「病人訪問の式」というお祈りがあります。その

初めのところに、司祭は病気の人を訪ねたら、家や病室に入るときに、まず最初に「平安がこの家にありますように」と祈るようにと指示されています。病気にかかった時には、さまざまな不安を感じたり、孤独の中に捕らわれたりすることがあります。

わたしたちの仲間のある司祭が、まだ若い頃、胆石になって手術を受けることになりました。手術の前日に、同僚の司祭がお見舞いに訪ねたとき、病室の外から中の様子を伺うと、その病気の司祭は、ベッドの上に起きていて、家族の写真を手にとり、ポロッと涙を流したところでした。他人に見せたくはないところを、お見舞いに行った司祭は見てしまったような気がして、暫く外で時間を費やしてから、何も見なかったような顔をして訪問したということです。

その病気の司祭は、それまでは大きな病気の経験がなく、手術を受けるのは、その時が初めてのことでした。それで、いろいろなことが頭の中に浮かんで来て、不安になったのでしょう。端から見れば、何日か経てば元気になってピンピンして戻ってくることは間違いないと思う程度のことなのですが、そして、ご本人も頭ではそのように理解しているのですが、いざ初めて手術を受けるといふ段になると、思いがけない心配や不安な気持ちに捕らわれてしまうのです。

病気それ自体の心配もありますが、それ以外の心配、家族のことや仕事のこと、或いは経済的なことまで、いちどきに沢山の心配事が心の中に湧き上がってきます。このようなときに、一人で孤独な状態にあることは、信仰の危機に繋がってくることです。そのような時に、病気の人に教会の交わりの内にあることを思い起こさせ、その人の上に平和を祈ることが、教会に託された宣教の働きです。

イエスさまが弟子たちに命じられた心得の中に、「その町の病人をいやし」なさい、ということがあります。病人を癒すことは、神の国の到来のしるしでした。「神の国はあなた方に近づいた」という宣言は、病気に罹っているいろいろな不安を抱えるような状態にあっても、あなたはサタンの支配のもとにあるのではなくて、主の恵みと祝福のもとにあるのだと言うことを告げる言葉です。肉体や精神がたとえ病んでいたとしても、決して孤独の中に捨て置かれているのではなくて、神さまが共にいて下さることを明らかに示すことが、弟子たちがイエスさまから委ねられた宣教の働きでした。そして、わたしたちにもその使命が委ねられています。

ところで、わたしたちは平和を祈ったり祝福を祈ることが、必ずしも上手ではありません。これは大変残念なことです。教会の中でも平和の挨拶を交わすのに気が進まない場合があったり、祝福し合うよりは足を引っ張り合うようなことが、時々起きたり致します。イエスさまは弟子たちを派遣するにあたり、「それは、狼の群に小羊を送り込むようなものだ」と言われました。わたしたち自身が、狼の群になっているようなことはないでしょうか。そんなことは決してないと、確信をもって言えるのであれば幸いなことだと思います。

パウロはローマの教会の信徒に、「あなたがたを迫害する者のために祝福を祈りなさい。祝福を祈るのであって、呪ってはなりません」と勧めています(12:14)。ましてや教会はキリストを頭とした一つの体です。祝福を祈り合う、平和を祈り合う交わりとして形成していかなければなりません。聖パウロ教会の会衆は、集っている人々がお互いに祝福し合っているね、平和を祈り合っているね。そのような姿が、聖パウロ教会には最も似合っているね、と言われるような教会になりたいものです。

イエスさまは、「行きなさい。わたしはあなたがたを遣わす」と言って弟子たちを派遣されました。みなさんの中には、自分は弟子たちと同じように宣教の働きに遣わされてはいないと、思い込んでいる方がいるかも知れません。確かに、わたしたちの多くは、伝道者として知らない町や村に出かけて行って、福音を宣べ伝えたり伝道の働きに専念するという事はないかも知れません。或いは、特別のワーカーとして宣教団体から派遣されて海外に行き、専門知識や技術を生かして奉仕することはないかも知れません。

しかし、形は違うかも知れませんが、わたしたちは、皆、派遣されているのです。聖餐式に与るたびに、最後に祝福の祈りを受けて退出するのですが、この祝福は、「派遣の祝福」と言われています。聖餐に与ること自体が大きな祝福をいただくことですが、最後の祝福は、礼拝を閉じるにあたり、それぞれの場へと遣わされていくための祝福です。「ハレルヤ、主とともに行きましょう」「ハレルヤ、主のみ名によって」と唱和して各自の場へと派遣されて行くのです。

わたしたちが遣わされる場は、家庭であったり、地域社会であったり、職場であったり、学校であったりするのですが、一人一人の生活の場、そこが遣わされ赴いていく場なのです。その生活の場では、いちいち聖書を開いて説き明かすような事はないかも知れません。しかし、それぞれの場でもって、神さまの賜る平和を生きることが、わたしたちの派遣の目的です。周りの人々の命が豊かなものになるように、神さまの祝福を祈り、祝福を分かち合うことが、わたしたちがそれぞれの生活の場に於いてなすべき宣教の働きです。

コロサイの信徒への手紙の中に、「キリストの平和があなたがたの心を支配するようにしなさい。この平和にあずからせるために、あなたがたは招かれて一つの体とされたのです。いつも感謝していなさい。」と勧められています(3:15)。わたしたちの信仰生活は、この御言葉に従ったものでなければなりません。教会生活を送ることは、平和の支配のもとに生きることです。それが神の国に生きる者の姿です。そのためにわたしたちは招かれ、キリストの体に結び合わされているのです。

わたしたちの交わりが、平和を祈り合い、祝福を祈り合うものとなるように、導きを祈りましょう。